

## 図書館目録の伝統と近未来

### －「守るべきこと」と「変えるべきこと」－

渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)

watanabe@hcs.tezuka-gu.ac.jp

## 0. はじめに

### ● 本日の責務

- 図書館目録とは結局どういうものか? : 伝統
    - 目録を担当したことの無い図書館員にもわかるように...
    - 目録の基本について易しく...
  - 図書館目録はこれからどうなるのか? : 近未来
    - 変革に向かう、動きの激しい数年<sup>1</sup>
    - 目録そのもの (OPAC) も、目録業務も、目録規則も
- この両方を80分で...

## 1. 目録の「伝統」: 知っておくべき基本<sup>2</sup>

### 1. 1. 目録法とその確立

#### ● 目録法の本質的特徴とは

- 目録担当者になって覚えていくこと
  - NACIS-CAT の操作、書誌レコードのデータ要素、
  - 記録のルール (情報源、転記ルール、例外もあわせて様々に)、記述文法、
  - 書誌階層と「固有のタイトル」、典拠レコード、NDC の使用法、などなど
- 今日は細部は飛ばして、目録の本質をいくつかのキーワードで
- 目録とは: 「メタデータ (metadata)」の一種
  - 「記述的メタデータ」: 情報資源の発見のためのメタデータ
  - 情報資源の「代替物 (surrogate)」を作成して操作
  - 圧縮と構造化 (発見に資するように)
  - 「一次情報は直接操作できない」という前提

#### ● 近代目録法の伝統

- たいてい引き合いに出されるのは
  - 1841 A. Pannizi 『大英図書館刊本目録』中の目録規則
  - 1876 C.A Cutter 『辞書体目録規則』

<sup>1</sup> 「特集: 目録の現状と近未来」『情報の科学と技術』58(9), 2008.9

「特集: これからの図書館目録に向けて」『現代の図書館』46(3), 2008.9

<sup>2</sup> 田窪直規編『三訂資料組織概説』樹村房, 2007

司書課程のテキスト。「目録法」「書誌コントロール」の両章を執筆担当しました。その折に図書館目録理解のキーとして考えたことをもとにしています。

- ・ 国際的標準化の確立
  - 1961 「パリ原則」(目録法原則国際会議)
  - 1969～ ISBD (国際標準書誌記述)
- ・ 本質的枠組みはこの時点で確立
  - カード目録を前提とした「圧縮と構造化」
- ・ それからの半世紀の展開
  - 対象資料の変化(多様化)への対応
    - 視聴覚資料、電子資料
  - 情報環境の変化と目録の機械化
    - 1968 LC/MARC の本格運用

## 1. 2. 目録をめぐるキーワード(7×2)

### ● キーワード1:「識別機能」と「集中機能」

- ・ 「パリ原則」における「目録の機能」
  1. 特定図書の所蔵の有無が確認できる
    - 著者とタイトルによって
    - 著者が表示されない場合はタイトルのみによって
  2. 条件に合う所蔵図書を(網羅的に)検索できる
    - 特定の著者の著作
    - 特定の著作の諸版
    - (特定の主題をもつ著作)<sup>3</sup>
- ・ 識別機能 (identification, finding list)
  - 主要なキーは著者とタイトル
  - 書誌記述の識別能力
- ・ 集中機能 (collocation)
  - 主要なキーは著者と主題
- ・ 「集中機能」を果たせる目録が重要

### ● キーワード2:「著作」と「版」

- ・ 記述対象は「版 (edition)」
  - 版の単位で識別できる書誌記述(版、出版、形態)
  - 刷や個別資料は識別しない
- ・ 背後にある「著作 (work)」も意識
  - 知的・芸術的な創造物
- ・ 同一著作に属する諸版を集中する機能
  - さまざま: 改訂版、翻訳版、文庫版、大活字版、影印版、電子版...
  - 利用者が適切な版を選択できるように

---

<sup>3</sup> パリ原則は主題アクセスを範囲外とした文書のため、主題からの検索に言及していない。しかし主題からの集中機能が必要なのは、当然の了解事項である。

● キーワード3 : 「記述」と「標目」「アクセスポイント」

- ・「標目 (heading)」=見出し： カード目録の検索に不可欠  
識別 (同定) のための記述と、検索 (発見) のための標目  
タイトル標目、著者標目、主題標目
- ・コンピュータ目録における「標目」  
より広く「アクセスポイント (access point)」  
記述からのインデックス生成、記述に対する全文検索も可能
- ・記述と標目の分離：今もなお  
責任表示： 識別を第一に考え、「転記の原則」(資料優先)  
著者標目： 検索のために、慣用形 (利用者優先)

● キーワード4 : 「統一標目」と「典拠コントロール」

- ・集中機能を実現する「標目」管理  
著者・主題の「典拠コントロール (authority control)」  
(NACSIS-CAT では著者だけ。主題は無管理)
- ・同一実体には一意な「統一標目 (uniform heading)」を設定  
別名とともに「典拠レコード」として管理  
同一実体の様々な名称を確実に集中  
統一標目： Arendt, Hanna, 1906-1975  
別名： Arento, Hanna | アーレント, ハンナ | アーレント, ハナ | アレント, H  
異なる実体を確実に区別して集中  
鈴木, 健二 (1928-) | 鈴木, 健二 (1929- 美学) | 鈴木, 健二 (1929- アナウンサー)
- ・著作の諸版を集中する「統一タイトル (uniform title)」  
無著者名古典など限定的に典拠コントロール
- ・情報源からの転記にとどまらない、調査・判断を要する作業

● キーワード5 : 「統制語彙」と「事前結合」

- ・主題アクセスの保証 (主題による集中機能)  
「統制語彙 (controlled vocabulary)」に基づく「主題標目」  
自然語に頼らず、人手での標目付与
- ・具体的には、「分類記号」と「件名標目」
- ・複合主題をできる限り1標目で示す「事前結合索引 (pre-coordinate indexing)」  
抄録索引 DB のシソーラスは多くが「事後結合索引 (post-coordinate indexing)」  
複合主題「中国の鉄道史の事典」  
事後結合： 中国 鉄道 歴史 辞典 (4つを付与)  
事前結合： 鉄道—中国—歴史—辞典 (BSH：基本件名標目表)  
686.222033 (NDC：日本十進分類法)  
\*686 (鉄道) +2 (歴史) +22 (中国) +033 (辞典)

- キーワード6 : 「記述文法」と「MARCフォーマット」
  - ・メタデータの「エンコーディング (Encoding)」

近年は、意味的側面 (データ要素の定義や記述ルール) とは分離するのが潮流  
例えば、「ダブリン・コア」はデータ要素の規定のみ  
目録規則は両方を一緒に規定  
「ISBD 区切り記号」などの「記述文法」(エンコーディング規定)
  - ・コンピュータ管理のためのエンコーディングが「MARCフォーマット」

1960年代に実用化 : 現在主流のXML等とは全く違う、独自の形式 (図3)
  
- キーワード7 : 「集中目録」と「分担目録」(目録作業)
  - ・各館での目録作業から、何らかの共同化へ : 作業の効率化、品質向上、総合目録
  - ・方法1 : 集中目録作業 (中央で一括作成して配布)

国立図書館の印刷カード、MARC頒布 民間MARC
  - ・方法2 : 分担目録作業 (共同で作業を分担)

NACSIS-CATなどの「書誌ユーティリティ」
  - ・効率化、品質向上の点で、必ずしも優劣はつけがたい

### 1. 3. わが国の目録の特異性

- 日本目録規則 (NCR) をめぐって
  - ・『1965年版』: パリ原則に忠実、国際化・詳細化
  - ・『新版予備版 (1977)』: 簡略化と独自の展開
  - ・『1987年版』: 独自展開を踏襲、「書誌構造」の導入  
その後、電子資料、継続資料、和古書・漢籍等を改訂  
最新版は『日本目録規則 1987年版改訂3版』(2006)
  
- 日本と世界1 : 「基本記入方式」と「等価標目方式」
  - ・著者基本記入方式 : 「パリ原則」、「英米目録規則」、その他多くの規則  
対象資料の標目のうち、最も重要なもの (普通は第一著者) が「基本記入標目」  
基本記入標目選定の複雑さ (目録規則の少なからぬ部分)  
もともとの大きな目的は、カード目録・冊子体目録の作業上の便宜  
もう一つ、「基本記入標目とタイトルで著作を識別」という考え方
  - ・等価標目方式 (記述独立方式) : 1977以降のNCR、他には中国・韓国の規則  
基本記入標目を定めない (標目はすべて「等価」)  
目録作業の効率化、目録規則の簡略化
  - ・国際標準と異なる東アジアの目録
  
- 日本と世界2 : 「書誌構造」
  - ・NACSIS-CATでおなじみの「書誌単位」「書誌構造」

NCR1987年版で導入
  - ・わが国の規則に独特の仕組み

- **日本と世界3 : NACSIS-CAT のもとでの大学図書館目録**
  - ・ NACSIS-CAT 独自の「CATP フォーマット」(エンコーディング)  
MARC フォーマットを用いず  
各機関のシステムもこれに準じる  
(海外の図書館システムは MARC21 フォーマットが標準)

#### 1. 4. まとめ：図書館目録のアイデンティティ

- **図書館目録のアイデンティティ**
  - ・ 一般的なデータベースや情報検索システムにはない独自性  
あまりにも早く作られたことによる「過去の遺産」も  
例えば、エンコーディングの独自性  
しかし、守り育ててきた貴重な「アイデンティティ」も
  - ・ **アイデンティティ (1) : 集中機能の追求**  
典拠コントロールの意義
  - ・ **アイデンティティ (2) : 対象資料の世界を構造化**  
「著作」と「版」の考え方  
抄録索引データベース等にもほとんどみられない

### 2. 目録の「近未来」：これからどうなるか

#### 2. 1. インターネット時代の図書館目録

- **図書館目録にとってのインターネット<sup>4</sup>**
  - ・ **目録の可能性を広げる福音： 当初の空気**  
書誌情報流通の拡大 (低コストで手間もかからず)  
利用者への提供、作成のための共有  
新たな操作対象 (ネットワーク情報資源)  
困難さはあるが、目録の「障地拡大」の可能性 (「メタデータ」へ拡張)
  - ・ **目録の持続可能性への脅威： 最近の空気**  
ネットワーク情報資源の爆発的増大  
メタデータ作成は追いつかない (相対的な「障地縮小」)  
検索エンジンの進歩 (Google など)  
生産 (出版界)・流通 (Amazon など) 段階のメタデータ  
ネットビジネスのための商品情報だが、「書誌情報」との重なり  
図書館界の制御の枠外で、大量の書誌情報が露出  
大規模デジタル化プロジェクト (Google ブック検索など)  
書誌コントロールの前提条件の変化  
→ 目録は情報発見の “one of them” に

---

<sup>4</sup> 渡邊隆弘「書誌コントロールの将来をめぐる論点：LC の WG 報告書とわが国での検討状況から」『情報の科学と技術』58(9) 2008.9. p.430-435

## ●「目録の危機」論議と将来展望

- ・ 2005 年ごろから、米国の研究図書館界を中心に
  - 目録の相対的な地位低下 (前項)
  - 進歩のない OPAC (次項)
  - 作成・維持のコスト： 基本的に人力のデータ作成
  - 生き残りのためには？
    - 機能強化、利用開拓、他のシステムとの融合、効率化...
- ・ LC「書誌コントロールの将来 WG」報告書 (2008.1)<sup>5</sup>など
- ・ 国内でも
  - 「国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針 (2008)」(2008.3)<sup>6</sup>
  - 「次世代目録所在情報サービスの在り方について (中間報告)」(2008.3)<sup>7</sup>  
(国立情報学研究所「次世代目録 WG」)

## 2. 2. 新しい OPAC への模索<sup>8</sup>

### ●「次世代 OPAC」の探求

- ・ 米国を中心に 2006 年ごろから続々と標準的な方向性が定まりつつある段階
- ・ Google に学ぼう
  - 「フィットの度合い」順に表示 (「レレバンスランキング」)
  - 入力間違いに対処 (スペルチェック)
- ・ 図書館の伝統資産を再生しよう
  - 件名標目などの新たな利用 (「ファセット検索」)
  - 「著作」による集中 (「FRBR 化」)
- ・ Amazon.com や YouTube などにも学ぼう
  - 表紙画像や内容紹介の利用
  - 利用情報の再利用 (レコメンデーション)
  - 利用者が参加できる目録
    - コメント、レビュー、分類 (カテゴリー) やキーワード (タグ付け)

<sup>5</sup> 注 4 文献参照。原文は、<http://www.loc.gov/bibliographic-future/>

<sup>6</sup> <http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kihon.html>

<sup>7</sup> [http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg\\_interim.html](http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg_interim.html)

<sup>8</sup> 工藤絵理子, 片岡真「次世代 OPAC の可能性—その特徴と導入への課題」『情報管理』51(7), 2008.10

[http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/51/7/51\\_480/\\_article/-char/ja](http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/51/7/51_480/_article/-char/ja)

例えば以下のようなシステムが。興味のある方は実際に動かしてみてください

NCSU New Catalog <http://www.lib.ncsu.edu/catalog/>

ノースカロライナ州立大。レレバンスランキングやファセット検索など

AquaBrowser Library <http://www.medialab.nl/>

Metalib 社 (オランダ) の開発したシステム。情報の視覚化など

SOPAC (aadl.org) <http://www.aadl.org/catalog>

アナーバー公共図書館のシステム。利用者によるタグ付けなど

OCLC FictionFinder <http://fictionfinder.oclc.org/>

フィクションを対象に、FRBR 化を実験するシステム

OCLC WorldCat.org <http://www.worldcat.org/>

世界最大の総合目録。様々に新たな機能を加えて、進化している。

・電子リソース等との統合検索

目録にとどまらない情報発見 (discovery) システム

2. 3. 新しい目録規則の世界

●求められる目録規則

- ・資料の多様化に対応して改訂されてきたが、十分ではない  
カード目録時代の枠組み → 章ごとの改訂では限界
- ・OPACに対応した規則に  
「記述」だけでなく、「標目」も抜本的に
- ・媒体の多様化、複合化に、真に対応した規則に  
「資料種別」による章立てに限界
- ・「コンテンツ」と「キャリア」(内容的側面と物理的側面)の問題  
デジタル環境では、同じ「著作」の「版」違いが増加  
「版」の整理が必要(内容が変わる場合、物理媒体が変わる場合)
- ・図書館外の世界との「相互利用性」  
孤立しては、使ってもらえない

●FRBR (書誌レコードの機能要件)<sup>9</sup>

- ・今後の目録規則の基礎になる枠組み(概念モデル)
- ・Functional Requirement for Bibliographic Record (IFLA 1997)  
書誌レコードの構造分析・・・「実体関連モデル (E-R モデル)」
- ・目録利用の「ユーザタスク」を設定(利用者指向の分析)  
「発見」「同定」「選択」「入手」  
書誌レコードの各項目(「属性」)は何のためにあるのか?
- ・資料を4段階の枠組み(抽象→具体)で把握(図4): 4つの「実体」  
「著作 (Work)」・・・知的・芸術的創造物の単位  
「表現形 (Expression)」・・・文字、音声等で表現された単位  
「体現形 (Manifestation)」・・・キャリアが確定し、具体物となった単位  
「個別資料 (Item)」・・・個別の一点一点  
→特に、「表現形」の設定が新しい
- ・さらに「個人」「団体」「家族」「物」「出来事」「場所」「概念」との関係  
著者名典拠や主題情報にあたるもの

●「国際目録原則」の策定<sup>10</sup>

- ・「パリ原則」(1961)に代わる原則を
- ・2003年以降、地域ごとにIME ICC(専門家会議)を開いて検討  
アジア地域は2006年8月のIME ICC4(ソウル)
- ・間もなく(年内?)完成予定

<sup>9</sup> 和中幹雄ほか訳『書誌レコードの機能要件』日本図書館協会, 2004.3. 121p  
WWW版全文 <http://www.ifla.org/VII/s13/frbr/frbr-jp.pdf>

<sup>10</sup> *Statement of International Cataloguing Principles* (策定途上のページ)  
[http://www.ifla.org/VII/s13/icc/principles\\_review\\_200804.htm](http://www.ifla.org/VII/s13/icc/principles_review_200804.htm) (日本語訳もあり)

● AACR (英米目録規則) の全面改訂<sup>11</sup>

- ・ 2002 AACR2 2002 rev.刊行 (ルーズリーフ式)
- ・ その直後から、「AACR3」改訂の活動
  - 以後、紆余曲折 (何度か草案も公開されたが、議論が沸騰して遅れ気味)
  - 現時点のタイトル: RDA: Resource Description and Access
    - \* 「目録」の語が含まれない
  - 2008.11 に完全草案公表、2009 年刊行予定
    - (当初は 2006 の予定。どんどん遅れているが...)
- ・ 目標
  - 「デジタル世界のためにデザインされた、資源記述とアクセスの新しい標準」
  - あらゆる種類のリソースに対応、図書館外のコミュニティでも使用可能
  - データを格納・操作するシステム等から独立し、幅広い相互運用性
- ・ 特徴 (現時点で明らかな範囲で)
  - FRBR を強く意識して取り入れ
    - 章立ても FRBR が分からないと理解不能な構成 (図 5)
  - 「資料種別」(図書、地図…など) による章立てを撤廃し、データ要素別の章節立て
    - 例えば、「責任表示」として、すべての資料種別に関するルールを列挙
  - 「資料種別」を二本立てに (内容の側面と、物理的な側面)
    - コンテンツの区分・・・text, image, notated music など
    - メディア (媒体) の区分・・・audio, computer, microform, unmediated など
  - 各データ要素に「何を記録するか」に特化 (記述文法は扱わない)
    - 「プレゼンテーション」の仕方は規則の範囲としない
      - (ISBD 区切り記号法も言及しない)
    - 「意味」と「構文」の分離: 現在のメタデータの考え方の主流
  - 著者基本記入の考え方は、基本的に維持 (Preferred Access Point と呼ぶ) の方向
    - 著者 (Creator) + タイトル、で著作を識別
    - 典拠コントロール、典拠レコードを明確に位置づけ

● NCR 2 OXX 年版

- ・ ???

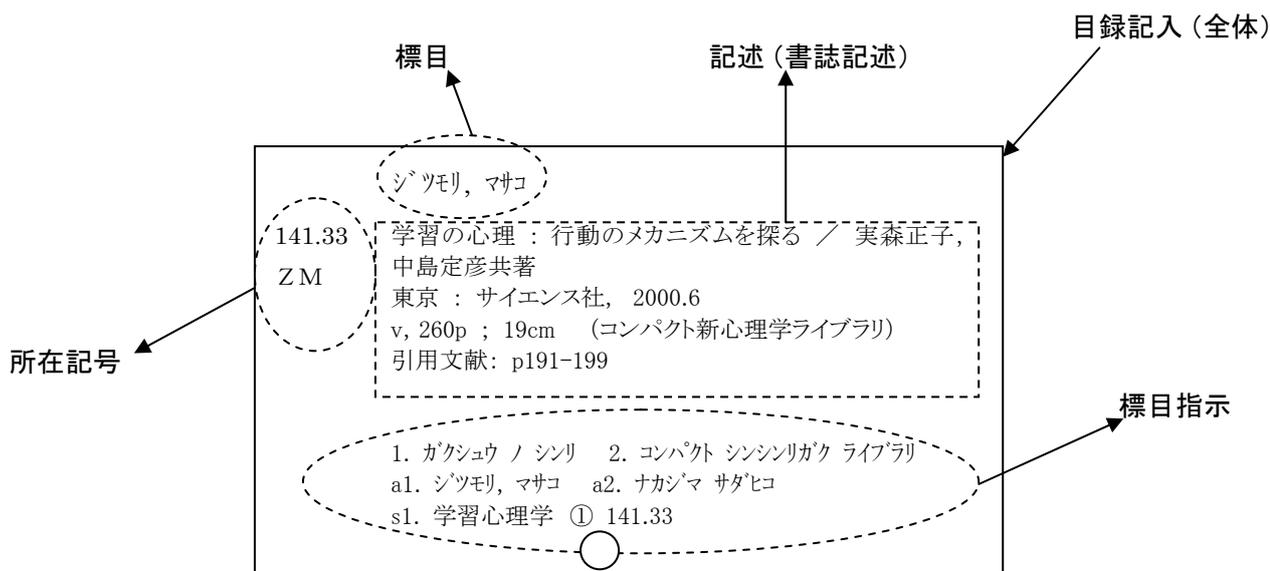
---

<sup>11</sup> Joint Steering Committee for Development of RDA. <http://www.collectionscanada.gc.ca/jsc/>

### 3. おわりに

- 持続可能な図書館目録のすがたは？
  - ・ 機能向上と効率化の両立  
 どちらか一方、では難しい
  - ・ 国立情報学研究所「次世代目録WG」(次世代 NACSIS-CAT) の検討<sup>12</sup>  
 電子情報資源を適切に管理できるシステムの導入  
 新しい目録規則、OPAC に対応できる書誌データとデータ構造  
 現状を踏まえた、運用方式の改革  
 発生源入力 (外部データのよりシームレスな利用)  
 共同分担方式の最適化 (一定程度の集中化も検討)
  
- 「守るべきこと」と「変わるべきこと」
  - ・ より広い世界への開放と、アイデンティティの維持  
 二者択一ではなく、両方の方向性が必要
  - ・ 目録のアイデンティティ (前述)  
 日本の状況の厳しさ (記述に比して、典拠管理の貧弱さ)
  
- 大きな変化の時代に際して
  - ・ 細則よりも、基本的考え方や背景の理解を

図 1. カード目録とその用語



<sup>12</sup> <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg.html>

図 2. NACSIS-CAT のデータ構造 (「目録システム講習会」テキストから)

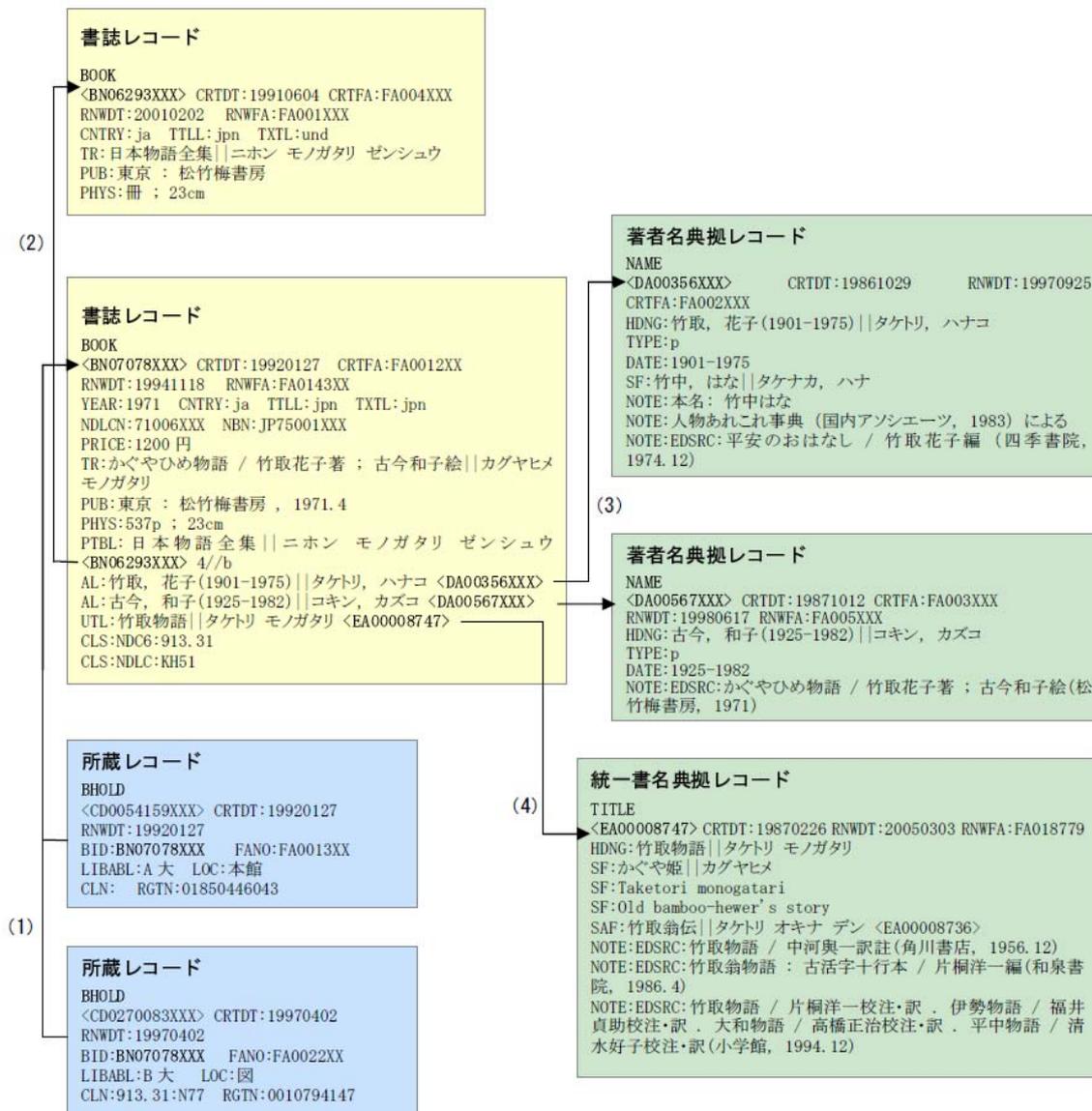
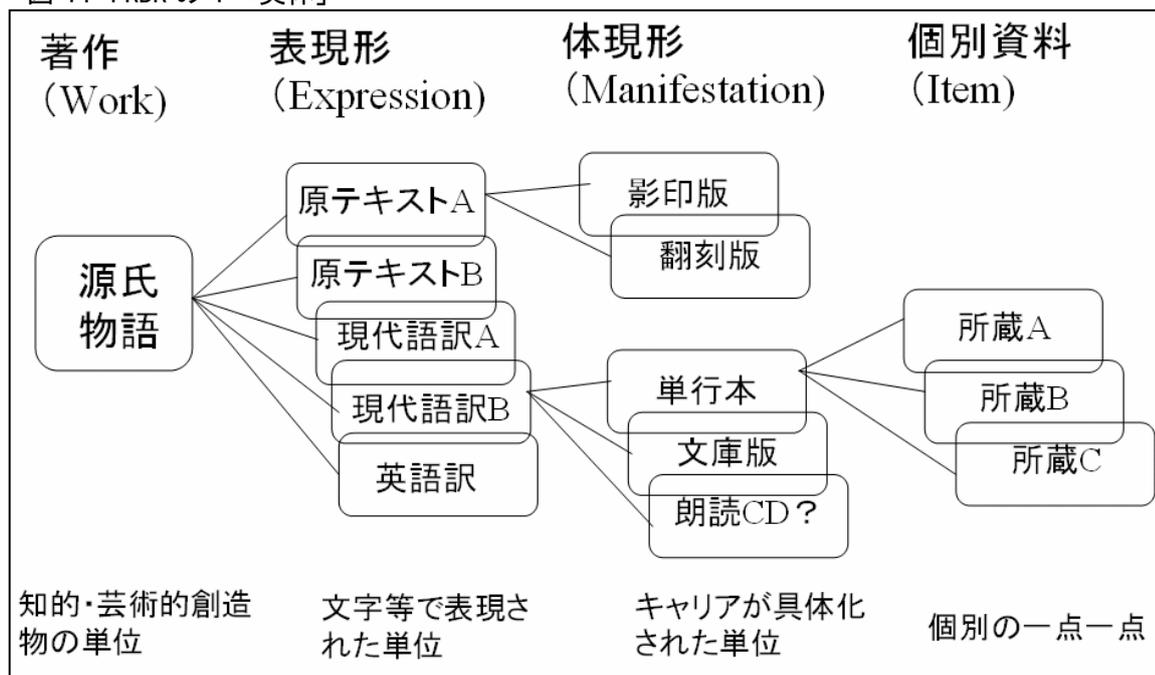


図 3. MARC フォーマットの一例 (MARC21 フォーマット)

```

Leader/00-23 *****nam##22*****a#4500
001 <control number>
003 <control number identifier>
005 19920331092212.7
007/00-01 ta
008/00-39 820305s1991####nyu#####001#0#eng##
020 ##$a0845348116 :$c$29.95 (£19.50 U.K.)
020 ##$a0845348205 (pbk.)
040 ##$a[organization code]$c[organization code]
050 14$aPN1992.8.S4$bT47 1991
082 04$a791.45/75/0973$219
100 1#$aTerrace, Vincent,$d1948-
245 10$aFifty years of television :$ba guide to series and pilots, 1937-1988 /$cVincent Terrace.
246 1#$a50 years of television
260 ##$aNew York :$bCornwall Books,$c1991.
300 ##$a864 p. :$c24 cm.
500 ##$aIncludes index.
650 #0$aTelevision pilot programs$zUnited States$vCatalogs.
650 #0$aTelevision serials$zUnited States$vCatalogs.
    
```

図4. FRBRの4「実体」



\*正確には、「グループ1」の実体。他に「グループ2」として「個人」「団体」「家族」の3種が、「グループ3」として「物」「出来事」「場所」「概念」の3つがあり、合わせて11の「実体」がそれぞれ関連しあう概念モデルとなっている。

「グループ2」は「グループ1」の4実体の生成に責任性を持つものである（例えば、著者は著作に、翻訳者は表現形に、出版者は体现形に責任性を持つ）。

「グループ3」は「グループ1」（一般には「著作」）の主題情報を表すものである。

図5. RDAの全体構成 (2007.12)

<p><b>セクション1: 体现形および個別資料の属性</b></p> <p>1章 一般的ガイドライン</p> <p>2章 体现形および個別資料の識別 (タイトルをはじめ、従来の記述の中心部分にあたる)</p> <p>3章 キャリアの記述 (従来の形態事項にあたる)</p> <p>4章 取得とアクセス情報の提供</p> <p><b>セクション2: 著作および表現形の属性</b></p> <p>5章 一般的ガイドライン</p> <p>6章 著作および表現形の識別 (従来の統一タイトル等にあたる)</p> <p>7章 著作および表現形の付加的属性の記述</p> <p><b>セクション3: 個人、家族、団体の属性</b></p> <p>8章 一般的ガイドライン</p> <p>9章 個人の識別 (従来の個人標目にあたる)</p> <p>10章 家族の識別</p> <p>11章 団体の識別 (従来の団体標目にあたる)</p> <p><b>セクション4: 概念、物、出来事、場所の属性</b></p> <p>12~16章</p> <p>* 16章(場所の識別)以外は、刊行後に展開予定</p>	<p><b>セクション5: 著作~個別資料の間の主要な関連</b></p> <p>17章 一般的ガイドライン</p> <p><b>セクション6: 資料と個人、家族、団体との関連</b></p> <p>18~22章 (従来の「標目の選定」にあたる)</p> <p>* 一般的ガイドラインと著作~個別資料の4章</p> <p><b>セクション7: 主題の関連</b></p> <p>23章 刊行後に展開予定</p> <p><b>セクション8: 著作~個別資料の間の関連</b></p> <p>24~28章 (「その他の関連」にあたる部分)</p> <p>* 一般的ガイドラインと著作~個別資料の4章</p> <p><b>セクション9: 個人、家族、団体との間の関連</b></p> <p>29~32章 (典拠レコードの「をも見よ参照」にあたる)</p> <p>* 一般的ガイドラインと個人・家族・団体の3章</p> <p><b>セクション10: 概念、物、出来事、場所の間の関連</b></p> <p>33~37章 刊行後に展開予定</p>
--	--